

令和4年度第1回静岡市葵区地域包括支援センター運営部会

1 日時

令和4年6月21日(火) 14:00~15:30

2 場所

静岡市民文化会館第1会議室

3 出席者

部会員：部会長 木村綾委員、西尾智美委員、田辺嘉代子委員、堀川敏昭委員

鈴木研一郎委員、田中博子委員、佐野敏幸委員、海野知子委員

行政：葵区高齢介護課 杉原課長、園田係長、大石主査、杉田主任保健師

杉本主任保健師、佐藤主事、成田主事

地域包括ケア推進本部 伊東副主幹、結城会計年度任用職員

4 事務局

葵福祉事務所 高齢介護課 高齢者福祉係

保健福祉長寿局 地域包括ケア推進本部 地域支えあい推進係

5 傍聴者

0人

6 議題

概要は以下のとおり

【城西地域包括支援センター】

堀川委員：全てに関して統一しているのが、やはり地域との連携が非常に大事だということで、全ての項目に書いてある。特に医療・介護の連携、それから地元の方々との連携ということになっている。本当に医療との連携はとても大事で、皆さんに連携について色々お聞きしたい。城西地域包括支援センターの場合、チームオレンジ駒形事業という他にない事業に取り組んでいて、そこを起点に地域の方々との連携を深め、また、そこから各種の事業紹介に至っている。今年の計画に、チームオレンジ駒形事業の城西における位置づけが書いてあるが、さらに深掘りした取り組みを考えているのか。

城西包括：一点目の医療と介護の連携について、チームオレンジ駒形事業以外に、自立プラン型地域ケア会議の中で、毎年医師と歯科医師に出席をお願いする中で、介護の方、ケアマネージャー、介護事業所との連携を深める機会を意識的につくっている。二点目、チームオレンジ駒形事業で「自宅ですっと」事業そのものが医療・介護というところで地域の皆様に周知する中で暮らし続けられる地域を、ということになっているが、基本的には、医療・介護と肩並び・横並びする形の中で地域を繋げていけたらいいなというコンセプトを持っている。チームオレンジ駒形事業は、令和2年度静岡県のモデル事業でスタートし、令和4

年度は3年目を迎え、一つの区切りをもって今活動をしている。令和5年4月から、自治会と地区社協を主体に持っていく形で今進めている。明日の夜、会議があり、今チーム員となっている医療、介護、それ以外に高齢者が暮らしていくときに必要な金融、食品、見守りの新聞店、住まい、あとは医療・介護以外の高齢者が暮らしていくところで必須な皆さんがメンバーになっているので、令和5年4月はその方たち全員をオブザーバーとして、自治会・地区社協主体の活動をサポートしていく形で今進めている。こうした位置づけをしていく中で、帰す場所は地域に住んでいる方が安心して暮らしていく地域づくりを目指しているが、それ以外にチーム員の皆さんはそれぞれ背中に組織を背負っておられる。その組織一つ一つを通して、その中でもサポーター養成講座の開催などで、この事業を通して認知症の理解が深まるような裾野を広げていく考えで今取り組んでいる。

【安西番町地域包括支援センター】

- 田辺委員 : 私は、日赤病院の長谷川氏の検査で健常者とフレイルの境だと言われている。認知症の人たちを地域で助けるという言葉があるが、私は何種類かの薬を飲んでいるけど、飲み忘れてしまうので、朝・夕飯前・寝る前・週に1回、薬の袋の上部に自分で大きくマジックで書いて忘れないようにしている。認知症の人を助けるのではなく、認知症でも生きていける工夫や提案について、介護の方では、認知症になっても生きていける教育はどこでやるのか。
- 木村部会長 : 色々な包括でも認知症カフェ等でやっているかと思うが、ちょうど安西番町地域包括支援センターで、認知症カフェ連絡会を継続で実施されているが、実際に踏まえての意見はあるか。
- 安西番町包括 : 安西番町圏域では、城西圏域と合同で認知症カフェ連絡会を開催していて、昨年度、認知症カフェ連絡会として、認知症になっても暮らしやすい地域づくりのために何ができるかを考える会議を今開催している。実際、今年度これからどういったことをやっていくのか決めていくが、その中でやはり認知症の地域に対しての理解や啓発活動が必要だとか、あとは、実際地域の方がどういうことで今困っているか、そういった連携を取りながら、そういったものを踏まえて活動していけたらどうかという意見が出ている。そのような意見を連絡会のメンバーと共有しながら、今後やっていく内容については決めていく。
- 木村部会長 : 介護者の視点もそうだが、当事者がカフェに来られるので、実際の当事者の意見や、あるいは、活動の中から当事者のそういったところを汲み取りながら事業をやっていけたらいいと思う。
- 鈴木委員 : 城西と安西番町を見させていただいたが、この間の協議会の中でも私が話した記憶があるが、S型や認知症カフェは今も従前どおり開催できているか。
- 安西番町包括 : S型に関しては、一からやり直しのところもあるが、開始し始めている。

- 鈴木委員 : 人数制限は従前どおりか。参加人数、回数、その他はどうか。
- 安西番町包括 : 地域によって違う。
- 鈴木委員 : この間もそうだったが、相談件数が増えていて、そこから要介護・要支援でない人たちの回していく受け皿がないとどうしようもないという話だと思う。そこをもし渋っているところがあったときに、包括として今のニーズに対して、認知症カフェ、S型、でん伝等々のキャパシティーとして足りているかどうかの評価をしていくと思う。アセスメントしてもう少し数を増やしたいといったときに、どういう動きをしていきたいと思いますという話になってくると思うので、その辺の状況報告、現状を把握してから次の課題を見つけていく。
- これは毎年そうだが、事業計画書は総花的にならざるを得ないのは重々承知しているが、少しそういう細かいところが攻めていけるといい。これは、全ての包括に言えることだと思っている。

【城東地域包括支援センター】

- 木村部会長 : 認知症高齢者の徘徊訓練の実施の検討をされているが、実際にその状況や地域の反応はどうか。
- 城東包括 : 認知症の徘徊訓練については昨年度から検討しており、地域の町内会長と打ち合わせをしたり、地域の主にボランティアたちと行政からの説明会を実施し、説明を受けてもらうところで終わっていた。今年度に入りだいぶコロナも落ち着いてきたので町内会長と相談をしたら、これはやると町内に言っているからやろうよとすごく積極的なご意見をいただいたので、7月の第1回実行委員会に関係者が集まり、具体的にどういう形で進めていくか検討するところまで今来ている。ただ、実施する町内は、広くやるのではなく一つの町内で小さくやる感じで、普段から見守りの体制がきちんとできていて、住民もとても温かい目で認知症の方を見守る方が揃っている町内で行う。皆さん本当にやる気満々だが、ただやったことがないので、内容については丁寧に説明していく必要があると感じている。
- 木村部会長 : 実際にやった後の住民の意見や反応もまた共有していきながら支援に繋げていただけるといいと思う。
- 佐野委員 : 認知症徘徊を発見する訓練は、番町地域で3年くらい前にやらせていただいた。安西番町地域包括支援センターが呼びかけて、一番町地区と三番町地区、いわゆる番町小学校区で幅広くやったが、やはり初めてやったから戸惑いもあり、やり方を覚えるだけで精一杯だった。これについては、防災訓練と同じように、繰り返しやっていくことが大事で、地域の方から、あれ一回で終わっちゃうのではやっぱりものにならないな、というご意見もあるので、今後、最低もう一回できればいいなと思う。特に認知症は、家族も口に出して「うちのおばあさんが認知症になっちゃった」と言うところまでなかなかいかない。周り

の人がちょっとおかしいなと気付く。そういう点があるから、やはり常日頃、S型デイサービスを主催する中で、会員だけを対象にするのではなく、ボランティアがまんべんなくいるので、町内を見渡してそういう芽生えがあったら、すぐにまずは包括と繋げてみてどういう方法論でいくか、やはり積極的にやっ
ていかないとならないと思う。徘徊訓練については、再度またやれば繰り返しが力になってくるのではないか。今度は、小学4年生くらいの子どもたちも入れてやれば、大きくなってからいきなりうちのおじいちゃんおばあちゃんが
おかしくなっちゃったとびっくりするよりは、知識としてそういうものが子ども
の頃から頭の中にあるのが大事だと思うので、なんとかまたやりたいと思
っている。

木村部会長 : やはりやってみて小さな気づきや、立場によって感じることや気付くことがあ
ると思うので、ぜひそういったところを踏まえて整理していただけたらいいと
思う。

【伝馬町横内地域包括支援センター】

堀川委員 : コロナがあり、今までできていたものが開催できなくなっていると思うが、だ
いぶ落ち着いてきているので、この事業計画が実施できる環境に、2年前3年
前と比べて大体どのくらいのパーセンテージでできあがっているのか。

コロナによって会議や ZOOM がオンラインでできるようになり、そういった
ものを有効活用して、空いた時間ができたとか、そういったことを逆手に取っ
て効果的になったことがあるのか。それと、圏域の状況の中で、特に S 型デイ
が 8 か所ある、これが多いのかどうなのかも踏まえて教えていただきたい。

伝馬包括 : 一点目の事業計画について、今年度の計画に対してはコロナ前と比べて 8 割く
らいできるようになったと感じている。ZOOM といった WEB 会議に関して
は、やはり移動手段が時間軽減されかなり有効的なので、ケアマネージャーと
の打ち合わせ等ではうまく活用をしている。一方で、自治会や民生委員との集
まりに関しては、なかなかオンラインが苦手な方もいるので、対面でやらせて
もらっている。S型デイサービスに関しては、8か所あるところが横内学区で、
コロナでも色々工夫してかなり活動的にやられている。一応、今年度うちの
ところも各 S 型デイサービスに 2 回くらいを目安に訪問させてもらい、お話を
させてもらう計画をしている。

田辺委員 : タワーマンションの話題が出てきているが、鷹匠のタワーマンションや呉服町
タワーもそうだが、皆が集まるスペースをつくり、それを売り物にしてやっ
ている。どうしても下へ降りるのも面倒になり、二十何階建てだと出かけない方
がいるので、そういうところを活用してミニ S 型くらいものを開催していつた
らいいと思う。

伝馬町包括 : マンション内でかなり孤立している高齢者も多く、特に伝馬町学区の鷹匠や伝

馬町に関しては、マンションに高齢者はいるが、自治会に入っていないで回覧板が回らず、情報がない高齢者もやはり多い。伝馬町学区はS型デイサービスもやっていない地域になっていて、一方でそういった場所を作るとなると、場所がないところもあるので、マンション単位でそういったものを行った方がいいのかを今後検討しながらやっというところと最近包括内でも話があった。

【長尾川地域包括支援センター】

- 海野委員 : 圏域の状況に高齢者の課題等が書かれているが、S型デイサービスが活発なところもあるが、そうでない場所もある原因はどのように考えているか。
- 長尾川包括 : 長尾川圏域は、南北に長いエリアで、南側は新北街道に沿った市街地、北は竜爪山の麓の中山間地があり、そちらはS型がないエリアになる。そちらは、住民が自主的にS型を立ち上げる環境がまだ整っていないため包括でも支援し、自治会・老人会の方をサポートしながら、今S型に似たような形の活動をサポートしている。
- 海野委員 : S型は、住民たちが立ち上げるデイサービスの形か。Sというのは何か。
- 長尾川包括 : 静岡型です。
- 海野委員 : 他の地域にはそういうものがあるのか。
- 長尾川包括 : 全国的に静岡が見本になっている。
- 木村部会長 : 静岡はS型デイサービスや介護予防の体操できる場所づくりをやっている。地域によって、あるところとないところがあり、その地域性により違いもある。生活支援コーディネーターや自治会関係の方たちなど、そういったところと協力しながらやっていただけたらいい。地域性によっては、住民主体で立ち上げていくのは難しいと思うので、その辺はやはりサポートが必要だと思う。
- 田辺委員 : 私も安東でS型のボランティアをやっている。会員が34名いたが、最近お一人亡くなり33名、そのうち男性は一人だけで、最近具合が悪くて出ていない。そういう感じで、女性ばかり。9時半からなのに8時半過ぎには並んで待っている感じで、男性をどうやったら引っ張れるか。大岩防災会館で麻雀教室があったので覗いてみたら、麻雀には十何人いた。男性をどうやったら引っ張れるのか。皆男性は定年になったら家で何をしているのか。その辺を皆さんで考えていただきたい。
- 木村部会長 : 長尾川だけではなく他のところもそうだと思うが、やはり現場でも地域でも男性をどう参加に促していくかはなかなか難しい。
- 佐野委員 : 基本的には、やはり中身の問題で、男性に興味のあるものを入れ込んでいく以外にない。うちの地域も最初は全く男性がいないところから始まって、12、3年やっているが、今それでも3人。男性の場合はやはり皆で体操や歌を歌うとかは嫌で、最初来ていても来なくなってしまう人がいる。女性が集まることで興味が湧いて、うっかりしていたらお茶飲みに行こうか、と言う人間が出てき

たりして、それが嫌で女性も出てこなくなったり、扱いがどっちにしても大変。基本はやはり男性も楽しめる中身を考える以外ないと思う。

鈴木委員：医療をやっていると、通院や要介護の人たちのデイサービスへの誘導も男性が大変。これは特性だと思う。集団生活とか、昔から井戸端会議は女性しかやっていない。男性が参加している井戸端会議なんてない。そこはもう特性なので、ある程度それで見えていくしかない。男性同士は、定年退職後は、職場の繋がりがなくなると地域の繋がりが元々ない。それを無理やりS型で地域をつくるなんて行政が言っているのもどうかと思うが、そこは難しいところなので、丁寧に話をしながら周りの目で見えていく。どちらかという、男性に関しては周囲の見守りの方が、もしかしたら集団としては有効か。参加させることを手を変え品を変えしても難しいと実感している。

【服織地域包括支援センター】

鈴木委員：⑤の取り組み内容で、圏域内に新しくできる医療機関との連携とは、新規開業の診療所か。

服織包括：静岡リハビリテーション病院が私たちの地域に移転する。病床数も数十の病院で、一つの起点になる医療機関になる。これまでに再三出ている地域の活動も、私たちが徐々に再開しているが、S型デイサービス等も一昨年はほとんど出向けず、去年も半分程度だったと思う。今年はほとんど再開しており、行った先でどうなっているか心配ではあるが、不活発やフレイルを懸念している。ちょうどこのタイミングでリハビリテーション病院が下りてくることで、今年度は地域リハビリテーションに非常に重点を置き、活動の一つの目玉として地域のリハビリを広がっていかうという目論見を持っている。

鈴木委員：地域リハビリは、国も力を入れ始めていて、何をもって地域リハビリというのかが見えていないところもあるが、そういう取り組みは、積極的に県中部のリハビリのセンターでやっているの巻き込んでいただいて、医師会とも協働してこれからやっていくので、お願いしたい。

田中委員：どこの包括も助け合いの生活支援コーディネーターの問題が、前回ずいぶん問題になったと思うが、その後どうなったのか教えてほしい。

地域包括ケア推進本部：運営協議会では説明する機会をつくったが、部会員には、まだ伝えていなかった。委託事業者が変わり、昨年度までは東海道シグマに委託をしていたが、今年度からは静岡市社協に変更になった。特に委託の業務内容が変わっているわけではないので、基本的には包括と生活支援コーディネーターが連携して事業を進めていくことになっている。

木村部会長：昨年度の部会では、包括とうまく連携を取るのがなかなか難しいという意見があったが、機関が変わって担当者も変わったので、今年度新たに包括の顔を見る関係をつくっていくところでは、後々の部会で状況を聞かせてほしい。今回

は1年交代ではなく、3年の期間があるので、中期的な期間で環境をつくって
いけたらいいと思う。

【千代田地域包括支援センター】

- 木村部会長 : ⑤の在宅医療・介護連携推進事業「顔の見える関係づくりをしていく」では、アンケートで評価をすると書いてあるが、誰が担当される予定か。
- 千代田包括 : 千代田地域には、団地が多くあり、一軒一軒回りアンケートを取っている。その内容で評価をしていくのと、あとは、これに関連して、今年度は、多職種での地域事例検討会も実施する。そちらでも顔の見える関係づくりができると思う。
- 木村部会長 : 多職種が集まった研修会でのアンケートでフィードバックしていく形か。
- 千代田包括 : そちらも含めてしていく。
- 海野委員 : ⑦にグループホーム連携会議を継続とあるが、この地区にはグループホームはどのくらいあるのか。
- 千代田包括 : うちの圏域だけだと5つくらいだが、城北地域の圏域と、今年度からは伝馬町の圏域も含めて開催して、今年度はとりあえず1回目が先月行われた。
- 海野委員 : 色々な施設があると思うが、グループホームを選んで連携している理由は何か。
- 千代田包括 : 私たちが委託されたのが2年前で、その前の包括のときにやっていたものを継続した形になる。
- 木村部会長 : 認知症グループホームだと、地域密着型サービスで在宅に準ずる住まいになるので、そういった意味では在宅で暮らしていて、その中でも認知症を抱えた方がいる住まいというところでは、入所のグループホームと包括がうまく連携していく必要性は非常にあるし、これからますます自宅に準ずる場が必要となってくるので、ぜひ連携や実態の共有化をしていく必要があると思う。

【城北地域包括支援センター】

- 田中委員 : 私は、5～6年前に静岡介護者きずなの会というボランティア組織に入ったが、月1回介護者が社協に集まって、色々な介護の悩み等を話す。その頃は、結構ケアマネに対する不満ややりきれない気持ちを吐露して介護しているもの同士で解決していくすごくいい会だと思ったが、最近考えてみると、そういう不満を言う方が少なくなり、きずなの会のみんなそれぞれが自分の楽しみ「あの人に会うのが楽しい」という形で集まれるようになった。おしゃべり会は、コロナ禍で社協が使えないときはお休みだったが、全く休まずに会が運営できた。考えてみると、なんで不満がなくなったのかと思ったときに、やはりちょうど重なっているのが、包括の件数が増えた時期がある。その後に介護保険に対する認識も皆増えたと思うし、包括の活動結果がそういうところに現れていると私としては考えているが、包括の数が増えたと同時に、配置職員が辞めたり入ったりして、すごく包括の職員が大変なのかなと。時間も長く勤めているし、毎日夜10時に通っても電気が付いていて、皆さんの健康状態やストレスはど

うなのかと心配している。

木村部会長 : 城北包括に限らず、どの包括も去年の報告でもそういったところがあり、やはり広報を周知する一方で相談の件数が右肩上がりになると、やはり職員に負担がかかっているのではないか。おそらく事業所でも工夫はされていると思うが、実態を教えてほしい。

城北包括 : とても人の入れ替わりが激しい包括なので、人一倍事業や職員のメンタルケアには気を配っている。幸いうちは5時半までだが、5時半ぴったりに必ず終わるようにして、5時40分には職員がいない状況をつくっている。そのために普段工夫しているのは、情報を共有して誰かが休んでも他の人がカバーできる体制にすること、一人の職員が問題を深く抱え込まないように、必ず2人・3人で対応をすること、情報をセンター長に共有してもらうことを心掛けている。ただ、この場でお願いしたいことは、要支援者がとても増えて、城北圏域は、居宅がたくさんありケアマネも一番多い地域だと思うが、もう要支援を持ってくれるケアマネが見つからない状態で、だんだん私たちが直営で直接担当しなければならないケースが増えてきている。多分、他の包括はもっと件数が増えてきているのではないかと思う。ただ、国も要支援は必ず包括が、というところはまだ変えてくれないと市から聞いているので、今後また1年、2年と経っていくうちに何件まで包括が担当を持つようになるのかとても不安になる。直営の方のプランを担当しているおかげで、もっと関わらなくてはいけない相談を見落としてしまうのではないかと今からとても不安に思っている。ぜひ、改善するために力を貸していただきたい。

木村部会長 : そうすると、要支援の方々の相談件数が増えている。相談のケースの中身はどういったものか。

城北包括 : 相談の中身は、介護保険の申請などの簡単なものもあるが、最近増えているのは精神疾患を持つ家族を抱えた世帯のような複合的な困難事例がとても増えている。8050みたいな家族が増えている印象で、一つの相談に関わる時間が長くなっている。

木村部会長 : 包括それぞれが同じような悩みを持っていると思う。

【藁科地域包括支援センター】

田中委員 : 藁科は山間地にあり、高齢化が進んでいて、市街地にある地域包括とは随分関わり方も変わってくる。その中ですごく丁寧に訪問活動をして、色々な対応をしていてすごく好感を持っている。やはりちゃんと話を聞いてくれる人が相談に乗ってあげることが一番元気の源になると思う。対象人数は少ないが、活動内容は濃いと思っている。

藁科包括 : 街の包括とは関わり方等が違い、うちの包括の特徴的なところは、圏域内の75歳以上の独居高齢者、あるいは高齢者夫婦を個別訪問して、毎年地域を決めて、

民生委員と相談して気になる人を訪問している。コロナ禍でなかなか難しい状況ではあったが、訪問してお話を始めると相談や悩みを話すので、やはり電話だけではなく、実際にお会いして話すのは大切なことだと実感している。今後ともまた続けていく予定である。

木村部会長 : 藁科の地域では、一方で⑥の清沢の移動問題や買い物支援、昨年度の生活支援コーディネーターの取組みで、買い物支援等が始まったようだが、実際そここの関わりはどうか。

藁科包括 : 生活支援コーディネーターが中心になって、とらやが移動販売で清沢、大川に来ていて、包括も後方支援という形で関わったが、今は地区社協や集落支援員がほぼ中心になって動いているので、活動があったときに少し参加する程度で、地域の方で主体的に動いている。

【美和地域包括支援センター】

木村部会長 : 4の②、介護予防の意識度調査は、どうやって予定されているのか。全体として精神保健分野との関係がいくつか出てくるが、地域性や地域の課題として何かあるのか。

美和包括 : 4の②の介護予防の意識度調査では、個別プラン型地域ケア会議のケースを年間通して事例が出るので、どんな事例だったかを主に検証して介護予防の意識がどの程度ケアマネージャーさんにあるか、意見として出たのかを検討したくて書いたもので、包括として何かイベントを開催して意識調査をするのではなく、プラン型で出た事例に対しての介護予防の視点を意識調査したくて記載した。2点目の精神保健は、やはり美和包括でずっと地域課題として挙げているのが、精神疾患を持った当事者やご家族に精神疾患があり、複合的な問題を抱えている世帯が多い。精神疾患を抱えている方の支援をすることも多く、対応する支援者、民生委員、地域の方々がどのように対応したらいいのかわからないとか、連携をスムーズにしてほしいというニーズがあり、長く関わっている中で最終的には安倍口団地の支援連携会議をずっと長くやっている。その中で、鈴木先生や去年からこころの健康センターの精神保健分野の専門の先生に入ってもらい、講義形式で支援者に向けたものを計画した。それがかなりケアマネージャーなどから好評で、対応についての内容だが、かなり目から鱗な基本的なことを再確認できた気づきがあったので、今年度はオンライン形式でグループワークみたいな形で事例を掘り下げて対応について検討できたらと思い今年度秋くらいに企画をしている。支援者が気軽に対応するときに変な意識を持たずに声かけられるようになって、包括や皆に相談してもらえる関係性が広がることを目的に活動をしている。

木村部会長 : なかなか精神分野は知らないところだと、疾患的な視点が全くないので、間違った判断や関わり方があって、やはり専門家に入っただけ、知識を得てい

くのはいいと思う。

鈴木委員：何十年か前に、認知症が痴呆と呼ばれていた頃に、僕らも痴呆になった人への対応の仕方、話の聞き方、声のかけ方も含めてよくわからなかった時代があったが、今はさすがにそういう時代ではなくなってきた。今度は精神疾患の患者に対しても同じようにちゃんとアプローチをすればいい。その部分は実は精神科の医者以外は得意ではないが、普通の街中ですれ違うような人たちの中で精神的な問題を抱えていたとしても、うまく対応していければいい。もちろん壁はできちゃうけど、その壁を乗り越えるだけのテクニックやスキルを身につけることで、こちらも恐れずに対応できるようになる。包括も対応する範囲がどんどん広がり、権利擁護や自殺の話も絡んで非常に複雑になってきている。なぜか私が参加している圏域はそういう問題が非常に表に出てきやすいので、いい事例として報告が挙げられればといいと思う。

【安倍地域包括支援センター】

佐野委員：先ほどの藁科と同様、安倍地域も奥が深く膨大な地域を抱えていて、最初に3名の体制でカバーできるのかと思った。人口比だと思うが、包括の職員の配置の数は、多いところだと8人くらいで、安倍地域は3人。私も色々なことで安倍の山間地や藁科の山間地に用事があって行くが、この前藁科地域一周回っただけで、厚生病院の近くの私の家から戻ってくるのに80キロくらいあった。そういう中で本当によくやっただいていて。特に、相談しやすい包括のワンストップサービスは本当にありがたい存在で、先ほども鈴木先生からお話があったように、どんどん仕事は増えてきている。ワンストップということで何でも受けるという、まずは入り口としてここから大変だと思うが、可能な限り住み慣れた自宅で生活が継続できるようにという思いでこまめに回っていると思う。この頃テレビのポツンと一軒家で、山間地でこんなところに人が住んでいるのかというところの映像を見ていると喜び勇んで生活しているが、一瞬だけ我々は見ているだけで、それが毎日の生活だったらとても自分にはできない。住んでいる本人にとっては、「家族に迷惑をかけずに生活スタイルを崩さなくて、住み慣れた自宅で生活したい」という人情は当然だと思うが、何かあったときにはどうするのだろう。食品をトラックに積んで売りに山間地を歩いている友達から一度聞いたことがあるが、とにかく行くのを待っていてくれるよと。それで、色々なものを売り買いするだけじゃなく、街の息子に娘にこれを届けてくれないか、これを知らせてくれないかということまで頼まれて、本当に親戚のような付き合いをしていると伺った。そういう中で、本当に頼りになる存在の包括支援センターが、近年皆に段々わかってきたので、相談しやすいセンター、ワンストップサービスという文字通りに、色々なことを相談できる窓口だとだんだん皆が知ることは、いい面と、この人数でこの広大な地域をカ

バーできるのかという心配がある。それと、⑦の右側に、各専門家、精神科医・弁護士等と連携を図るとあるが、これは包括支援センター独自で、こういう地域の医者や専門家と連携を図ることができるという意味なのか、誰がこれをお膳立てしてやっているのか。これを包括が独自にできるとしたら相当力があるということで、なかなか難しいのではないかと思う。最後に、やはり自治会や地区の関係者との連携が一番の力になる、一軒一軒のことをわかっているという意味では、山間地ばかりではなく地域で一番の力になり、頼りがいがある自治会、地域との連携がスムーズの包括だったら、さらに大きい仕事ができると思う。

安倍包括 : 3名体制で広い範囲を頑張っているのが現状で、自治会や地区社協の関係者との連携が本当に必要になってくる。私たち包括3人だけでは地区全体を把握しきれず相談も入りにくいところがあるので、そういう方たちと連携を図り高齢者の状況と地区の状況を知った上で活動するのが基本になってくると思う。私たちは包括が始まった平成30年度当初から、12か所あるS型デイサービス・サロン等に必ず毎月2回あるところは2回、10分でも5分でも参加している。そこで包括の時間を少しでも取ってもらい、包括の周知、包括を知っていますかと手を挙げてもらっている。その他に、情報があったら発信していく。例えば、介護予防、権利擁護、消費者被害のこと、全部それを発信して、紙ベースで渡すこともある。それをずっと続けた結果、S型とかサロンには、山間地ということもあるが、自治会、地区社協、民生委員、シニアボランティアが必ず参加している。毎回参加することによって、やはり包括の顔を覚えてくれて信頼関係がすごく強く、そこから私たちが訪問しなくても必然的に相談が入ってくる状況が生まれてくる。自治会や関係者の方も包括に寄る現状が今増えている、そういう方たちが多く包括に来所している。あとは、横の繋がりもあり、そこに来ているS型の高齢者も包括に関わりがあると、「あなた包括に行くとき色々教えてくれるよ」と、山間地は特に横の繋がりも強いので、繋がりも広がっているのが現状で、そういうところから3名体制でも今、どうにか業務がこなせている。あと、生活支援コーディネーター、民生委員、地区の方、保健師が入り、地区の状態を把握する圏域ケア会議を、毎年各地区で開き、訪問が重複しないように、それぞれの支援内容によって訪問する方を決めて情報共有して支援をしている。あと、ワンストップサービスはやはり往々の相談が入り、中にはネズミが出たり蜂がいっぱい出るけどどうしたらいいかと駆け込んでくる人もいるので、保健所等に連絡して連絡先を教えたり、例えば、電気屋を知りたいから教えてとか、そんな相談も入ってくる。包括、3名では本当に大変だが活動しているのと、あと、精神科医と弁護士との連携は、そんなに多くはないが、やはり精神疾患を患っている若い方の相談も入ってくるので、そうした場合にはこころの健康センターなど、繋がりがあるところをお願いを

して相談を掛けて、あとは権利擁護が必要な方、件数も多くはなかったが、弁護士に入って支援をしていただいたケースがあるので、そういうところとも今後連携を図っていくべきだということを計画の中に載せている。

【賤機地域包括支援センター】

- 西尾委員 : 成年後見による本人申立ての支援とあるが、本人申立てで年間どれ位あるか。
- 賤機包括 : 本人申立ては、ケアマネからの相談によって、年に1ケースくらい本人申立てを手伝うことがあった。やはり本人一人ではなかなか申立てまで至らない場合が多いので、ケアマネと協力をして補助・保佐の申立てのお手伝いをした。
- 西尾委員 : ご本人が不安を覚えられて、相談するところが欲しいようだったら、補助とか保佐とかの制度を利用するのがいい。本人申立てでいきましょうということまで繋げていくということですか。わかりました。ありがとうございます。
- 木村部会長 : なかなか本人申立てのところまでは、前提としてこの制度の周知や、繋いでくれるケアマネとか、その体制を日頃から整えておく。包括の周知は色々な包括でやられていて、この場合は小学校・中学校、比較的若い人への周知をされているが、狙いがあれば教えてほしい。
- 賤機包括 : 元々賤機地域包括支援センターでは、コロナ禍で地域の集まりが少なくなってしまった状況があり、今まではS型や地域の夏祭りのときに包括支援センターの周知活動をしていたが、それがなくなったことによって、包括で何をして進めていったらいいかを考えた。そこで、コロナ禍でリーフレットを配って皆さんに周知して相談に来ていただくことを考えた。今回、小学校・中学校に向けてリーフレットを作成したが、子どもの親御さんたちから民生委員に、またその親の方の相談が入ったという話もあった。地域に向けて広報活動はしている今までは高齢者ばかりを狙って病院やコンビニには配っていたが、小学校や中学校に対してのアプローチをあまりしていなかった。そこで今回、うちの圏域の小学校3校、中学校2校の校長先生・教頭先生に民生委員を通じてお話をさせていただき、学校でも福祉教育の一環として「まずはリーフレットを。包括支援センターがどんなものかを小さいうちから知ってもらうのも大事ではないか。ただ、難しいことはわからないので、わかりやすいものだったら」というお話だった。では、包括の中で広い世代にどうすればわかっていただけるかを考え、まずは漫画で知ってもらおうと。漫画で知ってもらうことで子どもたちにも読んでもらえる。子どもたちが読んで家に持ち帰り、親御さんたちがまた見ることで、より地域に広がっていくのではないかと思い、現在やっている。
- 木村部会長 : ぜひそうした間接的な効果をまた共有していただければと思う。